

ソプラノ歌手

寺島夕紗子さん

「ざわわ ざわわ」……誰もがどこかで耳にしたことのある「さとうきび畑」。沖縄の風が感じられるゆったりとしたメロディー、そして、哀しみと祈りを込めた歌詩は、聴く人の心に深く染み入り、揺さぶります。

作詩作曲をされた寺島尚彦氏（1930年～2004年）の生きざまを家族として身近で見えてこられ、また、ご自身も、ソプラノ歌手として、この歌を歌い継いでいる寺島夕紗子さんに、お父上のこと、沖縄のこと、平和のことをお伺いしました。

聞き手・構成：田中みどり

*表紙裏「リブラギャラリー」に関連するカラー写真を掲載しています。



— 今は、ソプラノ歌手として舞台上で活躍なさっていますが、主に、どのような歌を歌っていらっしゃるのですか？

日本では、私の学生時代はドイツ音楽（ドイツリート）を学ぶのが主流でしたが、私は、大学でフランス音楽を専攻し、大学院でさらにスペイン音楽を学びました。人があまり歌わない分野を、というあまのじゃく精神もありましたが、そこから民族音楽なども勉強して、今はコンサートの趣旨によってお客様に喜んでいただける歌を選んで演奏しています。

— ご家族は、音楽一家だったのでしょうか？

はい。父は作曲家。母は1960年に結成された「ヴォーチェ・アンジェリカ」という六重唱団のメンバーで、テレビ・ラジオで芸能活動をしていました。姉も、大学で声楽を専攻しました。

— 将来、声楽家になりたいと思ったのはいつ頃ですか？

たぶん幼稚園のときだと思います。母が歌っている姿をテレビで見たりしていて、子供心なりに印象深かったのかもしれない。将来、何になりたいのか聞かれたときに、「お花屋さん」「お菓子屋さん」と答えたりしていても、ずっと歌手になりたいという気持ちは揺らぎませんでした。人に直接的に何かを伝えることができるのが歌だと思っていたので。そして、両親と

姉と同様に、私も東京藝術大学に進学しました。

— お父様が、「さとうきび畑」を作詩作曲なさったのですね。

そうです。父が、自ら作詩をして、曲をつけました。

— お父様と沖縄の接点は？

東京育ちの父は、大学で作曲を学びましたが、卒業したての頃は作曲だけでは生活ができません。そのため、シャンソン歌手の石井好子さんの伴奏者として、「寺島尚彦とリズム・シャンソネット」というコンボバンドを率い、自らもピアノを弾くことで、生計を立てていました。父は、この経験で音楽家に必要な「場数」を数えきれないほど踏むことができましたし、石井さんは、父の作品を歌ってくださったりして、本当に貴重な経験でした。

そして、1964年6月に、父は、沖縄音協主催の石井さんのリサイタルのために、はじめて沖縄に行きました。これが、父と沖縄との出会いでした。

— その当時は、パスポートが必要な時代ですね。

まだ沖縄返還前です。当時は、ハワイに行くパスポートは1週間とれるのに、沖縄に行くためのパスポートは1か月以上もかかったと聞いています。

—— 返還前の沖縄は、どのような様子だったのでしょうか。

おそらく、当初は、南国情緒を楽しむような気分だったのでは。コンサート翌日に、地元の人にひめゆりの塔や壕などの戦跡を案内していただいたとのこと。当時は今のような整備がなされておらず、生々しい状態だったと思います。そして、道中でさとうきび畑の中を歩いた際、「足元には、たくさんの人々の骨が埋まったままです」という地元の方の説明を耳にした瞬間に目の前の光景がすべてモノクロームになってしまったのだそうです。ただ、さとうきび畑を吹き抜ける風の音が戦没者の嗚咽と怒号のように耳に残ったと。

そして、その夜に開催された沖縄音協主催のダンスパーティーで、父は乞われるがままにピアノを弾いたのですが、何の気もなく日本の童謡を弾いたところ、それまで踊っていた人たちの足音が静まり、いつのまにかすすり泣く声が聞こえてきて、次第に声をあわせて歌う人もでてきた。このときに、父は、沖縄の人たちの切なる思いに心を揺さぶられ、作曲家として、この経験を作品にして本土の人たちに伝えなければならぬという衝動に駆られたと言っていました。父も、東京大空襲で祖父母をなくしたり、特攻隊に志願する友人たちがいたり、軍需工場で爆撃に遭い目の前で友人が命を落としたり…、その沖縄の夜に、一度封印した様々な思いが、一気に湧き上がってきたのかもしれません。

——「ざわわ」という言葉が印象的ですが、これは？

はい、父が生み出した言葉です。さとうきび畑のあの時の風を表現するのに、「さわさわ」ではきれいすぎる、しかし、「ざわざわ」ではうるさすぎる、と、その表現としてふさわしい言葉に出会うまで2年弱もの時間を要したそうです。あるとき、「ざわわ」という言葉が、まるでニライカナイ*1からの啓示のように降りてきた、と。そしてようやく、思いをこめた詩が完成し、また、作曲に至ったのです。

—— オリジナルの曲は、11番まであるんですね。

「ざわわ」という言葉が66回繰り返されますが、全体としても10分を超える長さになりました。ですから、

父も、当初より、テレビやラジオで取り上げられることはないと言っていましたし、自ら「流行ることを拒否した歌」と言っていました。でも、音楽家として自分の受けた衝撃、そして、祈りの気持ちを表現することにこそ意味があったのだと思います。

—— しかし、次第に知られるようになった。

1975年にNHKの「みんなのうた」で流れました。もちろん、全部ではなく、1曲2分15秒の枠の範囲に編集されたものです。これを歌ってくださったのがちあきなおみさんで、これで全国的に知られるようになりました。既に森山良子さんが曲全部をレコーディングしてくださっていましたし、戦跡を案内するバスガイドさんが、バスの車内で口ずさんでくださったり、父の亡くなる直前には明石家さんまさん主演ドラマの主題歌になるなど、日本中に知られるようになりました。

—— お父様は、沖縄の人たちに受け入れられるか否か心配なさっていませんでしたか？

父が沖縄に行ったのは1964年でしたが、2回目の沖縄訪問は1995年です。その間、一度も行っていません。もちろん、常に沖縄のことは意識しており、自分なりに沖縄に思いを寄せていましたが、沖縄の人々の過酷で悲惨な戦争経験は、自分のような本土の人間が思っている戦争とは桁外れに違うことを知るにつれ、沖縄戦のことをよく知らない東京の人間が作った「さとうきび畑」が、沖縄の人たちにどのように受け止められてきたのか、その真実を知るのが怖いという思いもあったようです。

—— 沖縄再訪された後はいかがですか。

戦後50年たった1995年に、沖縄の平和祈念公園内に、「平和の礎」という慰霊碑が作られました。これは、敵味方関係なく沖縄戦などでの戦没者全ての氏名を刻んで慰霊をするものですが、父は、この記念式典の模様取材するレポーターとして沖縄に行くことになりました。そして、このときにやっと「さとうきび畑」が、沖縄の人々に受け入れられていることを知り、そして、一気に沖縄との距離が縮まりました。

* 1：海の遙か彼方の海底にあるとされる神々が棲む場所。亡くなった人の魂もそこに帰るといわれ、五穀豊稔と幸せをもたらす理想郷として沖縄の人々に信仰されている。

—— 寺島さんは、この歌をコンサートで歌うこともありますか？

はい。はじめて歌ったのは、大学院2年生の時です。秋田でのコンサートを依頼されたのですが、「さとうきび畑」もリクエストがきました。デビュー前の私は、いろいろな経験を積みたかと思っていたときですので、二つ返事で引き受けましたが、この「さとうきび畑」で涙を流すお客さんがいらしたのです。私はその光景に衝撃を受け、これからもこの歌を歌っていくのかもしれないと漠とした思いを持ったのです。

—— とはいえ、父の思い、娘の思いは必ずしも一致しないと思いますが。

客席の涙という経験をして、やはり、娘として、親の作品を歌うというのは、正直抵抗がありました。親の曲に頼りたくないという若いのが故の照れくささもあったかもしれません。でも、今は、親の七光り（母を合わせると十四光）は、私にとってかけがえのない大事な財産だと思っています。

—— 当時の寺島さん自身の沖縄に対する思いは？

大学生時代にボランティアで沖縄に行ったことがありましたし、沖縄は激戦地だったんだ、唯一の地上戦があったところなんだ、ということを知識として知っている程度でした。「さとうきび畑」を歌うにあたり、父に、作者としての思いを確認しましたが、「歌いたいように歌えばよい、ただし淡々と」と言われただけでした。忘れられないのは、2001年9月に沖縄で行った「さとうきび畑コンサート」でした。

—— ご家族で共演されたのですか？

1998年にデビューをした後、父と一緒にコンサートをしたり、ラジオや新聞などに出るということが増えてきました。でも、必ず別のピアニストが用意されていたので、父の伴奏で歌を歌うことはありませんでした。そうしているうちに、NHKの「そして歌は誕生した」という番組で「さとうきび畑」が取り上げられ、その番組制作のために2001年7月に父とふたりで沖縄を訪問することになりました。沖縄滞在中は、いろいろな方々とご縁ができたのですが、「ぜひ沖縄でコンサートをしたい」とお声がけをいただいたのです。

母も姉も声楽家ですので、どうせなら家族4人でコンサートをしようということになり、2001年9月14日に普天間基地に接している佐喜真美術館の丸木位里さん・俊さんの連作「沖縄戦の図」の前で、ファミリーコンサートが決まりました。

—— そのコンサートはいかがでしたか？

コンサートの日のわずか3日前、2001年9月11日に、ニューヨークで同時多発テロ事件が起こりました。たまたまその日にステージ用衣装を宅配で出したのですが、その荷物もこの混乱で間に合うかどうかかわからないという状況でした。アメリカが狙われたテロ事件ですから、沖縄の普天間基地でも戦車が並び、とにかく一種異様な緊張状態にありました。このような中でコンサートなどできるのだろうかと不安になったのに、地元の沖縄の人々は、実に泰然としていました。これが、沖縄の人々にとって日常生活なのか…ということに、驚きながらも、予定通りコンサートを開きました。このときは、外国の曲ではなく日本の曲だけのプログラムにしました。そして、はじめて父の伴奏で「さとうきび畑」を歌いました。

私は、会場やその周辺の空気に圧倒されつつ、とにかく普通に淡々といつもと同じように歌うことを意識していたのですが、歌い終わって気が付いたら、涙が止まらなくなってしまいました。自分でもよくわからなかったのですが、とにかく涙が止まらない。でも、このタイミングに、この場所で父と共演したことが、今後の自分の人生にとって大きな意味を持つことになったのです。

—— 「さとうきび畑」に対する向き合い方は変化しましたか？

基本的には変わらないです。今でもずっと「さとうきび畑」を歌っていますが、私自身は戦後生まれですから、沖縄戦も知らないし、なんの辛い思いもしていない。そんな私が、この歌を歌っていいのかな、という気持ちはいつもあります。ただ、学んだり、考えることは絶対にやめるつもりはありませんし、自分のできる範囲で、自分のできることをしていこう、という気持ちで歌い続けています。

——「さとうきび畑」が反戦歌と言われることもあるようですが。

歌をどうとらえるかは、個々人の自由だとは思いますが。ただ、作者である父、それを歌う私の気持ちは、あくまでも、音楽であり、芸術であり、一つの表現方法であるということです。沖縄で受けた衝撃を自分なりに消化し、その思いの発露のために音楽という形で表現したというべきでしょうか。なので、ダイレクトに反戦歌と言われると、あんまりしっくり来ないかもしれません。

—— 2012年4月1日に、読谷村に歌碑を建立したそうですね。

沖縄の方々からの提案でした。当初、歌の誕生の地である摩文仁の丘を希望していたのですが、国有地は無理でした。そのときに、米軍が最初に上陸した地点のひとつである読谷村が手を挙げてくださいました。提供して下さった土地も、米軍に接収され、のちに返還された場所でした。

—— 費用はどのように捻出したのですか？

まず、歌碑建立実行委員会を設立し、目標金額を2000万円と決めて、全国に寄付を募りました。また、私たちも、15か月の間に13回の歌碑建立資金造成コンサートを開催して、その売り上げを全額寄付するなど、資金集めに協力しました。

しかし、実は、実行委員会を立ち上げた直後に、東日本大震災が起こりました。このような状況下では、とても目標達成は難しいだろうとも思ったのですが、私たちの平和に向けたあゆみを止めてはならないとの思いから、一歩ずつ進んでいきました。ありがたいことに、被災地の方々からもたくさんのご寄付をいただきました。

—— どのようなアイデアでデザインされたものでしょうか。

いわゆるご当地ソング的歌碑にはしたくありませんでした。沖縄の古い住宅にみられる「ヒンプン」*2、を歌碑広場のテーマにし、歌碑自体は歌の歌詞に出てくる「鉄の雨」をイメージして、特殊な鉄で作られてい

ます。また建立地・読谷村に米軍が上陸した日であり、歌碑建立記念日でもある4月1日には、碑の真ん中に開けた窓から、東シナ海に沈む夕陽が見えるようにデザインしています。これは、いずれも「二度と戦争がやってこないように」という祈りをこめています。

—— 碑は、寺島家の所有物ですか？

いいえ違います。もともと歌碑建立実行委員会が企画をしたものです。私は委員の一人として参加した立場にすぎません。そして、完成した歌碑は、読谷村に寄贈しており、完全に村の所有物になっています。

—— 歌碑建立に先立ち、お父様は2004年にお亡くなりになりました。

倒れて半年で亡くなりましたが、その間際まで、できうる限り舞台に立っていました。イラク戦争も始まっていた時期で、イラク戦争をテーマにした「ひとつだけの命」が父の遺作となりました。その当時の父は「あといくつ戦争を悲しむ歌を書けばよいのだろう」と口癖のようにつぶやいていました。

—— 芸術家の立場から見ると、弁護士はどのような存在ですか？

私たちも、実は作品を読み解くためにロジカルさが必要なのですが、さらにその上に感情を載せて表現するため、やはり気持ちが先走ってしまい、感情優先になってしまうこともあります。弁護士さんは、その先走った感情の中に、実は理屈があることを見抜き、それを掬い上げ、きちんとガイドして下さるとありがたいと思います。そして、人々が平和に生活できるように力を尽くしてください。

プロフィール たらしま・ゆさこ

東京都出身。ソプラノ歌手。洗足学園音楽大学講師。雙葉高等学校を経て、東京藝術大学声楽科卒業、同大学院修了。文化庁在外研修員としてスペインに留学。第23回フランス音楽コンクール第1位、第8回日仏声楽コンクール第2位他。国内外のコンサート、NHKテレビ、ラジオをはじめ多くのメディアに多数出演。「さとうきび畑」等3枚のCDをリリース。父は「ざわわ」という歌詞が印象的な「さとうきび畑」を作詩作曲した寺島尚彦氏。母は歌手でヴォーチェ・アンジェリカのメンバー。

*2：家の門の内側にある目隠し。沖縄の魔物は角を曲がるのが苦手なため、直進して入ってこないように魔除けの意味もある。